

## 光 秀 の 瞳

委 員 虚

彦

この拙き一篇をエイチ、アイ兄に捧ぐ。

麗二の乗つた夜行列車はすべてのものを破壊する様な音を立てながら轟然まっしとらに高原の深夜を北へ走つてゐた。氣持の悪いスチームの温味ぬくみと薄暗い電燈の光にだるんだ列車内の空氣は何となく聳ゆまひする程でその上にひどいカーブを廻る時や停車場のポイントを過ぎる時の名狀し難い動搖がも早や麗二をたねきれないほどなやました。

多くの乗客は皆信玄袋や毛布などを枕にして自分が今何處を通過してゐるかと思ふことは夢にも見ないらしいように思ひ／＼に深い眠りに落ちて居た。曇つた窓硝子の外には暗い冷たい神秘的な闇が何者かを暗示するかの様に全く静寂な状態に淀んで居た。そして時々突然深い芒の中に立つた老樹や丸太小屋が列車の硝子戸を通して流れるいくつかの四角な黝黒い光の中にいかにも荒廢したらしい一部分を見せてすぐ又あの神秘的な色のこもつた闇の中に消へ去つた。

「今眠り切らずに居るのは自分一人だ」こう氣附いた時麗二の眼には又新しい涙が浮んだ。そして彼は彼がどうしてもこんな疲れたながらも眠り得ぬ理由を一々詳しくしらべて見た。

こうして彼は今度の休暇に受けたひどい手疵の未だ殆んど癒へぬ間に追ひ立てられぬばかりにして學校のあ

る都市へ故郷を出發したのであつた。二週間程の惨ましい追憶の殿堂の扉を開くと麗二は頭の毛を坐り取つても足をばたつかしても落着き得られぬ悲しさに捉はれるのであつた。それはそれ程惨めな哀しい滞在であつた。

と麗二の眼には停車場までわざ／＼見送つてくれた隣りの純さんや妹達がこの寒い冬の夜更けを野良の石塊道を急いでゐる姿が明瞭と浮んで來た。そしてあの幼い時分栗拾ひに行つた小山や非人のよく寝て居た祠なごの前を通り越して行く妹達の姿が丁度裏山の共同墓地の前まで辿り着いた時をして三人の妹達が黙つてその墓地の新しい墓標に手を合せてぬかづく姿に思ひ到つた時麗二の胸に漲つた激情はも早やその高潮に達して居た。麗二はもうたゞ切れなくなつて車窓の硝子に頭を押し當て、さめざめと泣いた。

それはかうである。

麗二が歸省したのは丁度二週間程前であつた。新しい香に満ちた羅紗の洋服に光る金の釦は少なからずこの片田舎では珍らしがられた。しかし麗二の今度の歸省を心から待ち心から喜んだのは父でもなければ母でもなく土産を澤山もらつた妹達でもなかつた。唯彼の祖父であつたのである。

「おゝ麗か、かう早からうとは思はなかつたのに。まあ／＼早くてよかつた。」

彼が懐しい裏本戸から荷物を車夫に運ばせながら勝手口に入りかけた時皺の深い大きな頬のある頬に笑を浮べて出て來ながらこう云つたのはあの懐しい祖父であつた。麗二の聲を聞きつけて隣りから走りつけて來た純さんと純さんの阿母さんにすゝめられてお隣りに湯をもらひに行つても祖父は薄暗い下り口からこそ／＼

と自分の下駄を撰り出して彼の後について來るのであつた。そして麗二がひたつた桶風呂の前に踞しゃがんで大きな煙管で煙草を喫みながら色々話しかけては彼の答をさも満足らしく聞き取つて居た。

その夜は夕飯がすんでから久し振りで皆一所に炬燵を圍んで話をした。大きな久留米耕の蒲團も古い炬燵の櫓も父の顔も母の顔も三年前とは少しも變つて居なかつた。しかし大人びて來た妹達の顔とわづかの年月の中にこれ程までも思ふ程窶れて來た祖父の顔は明々めいめいと照つたランプの下で皆集つて炬燵にはいつた時特に麗二の心を驚かした。しかし祖父の頬に彼が幼い頃から同んなじ大ききで變らぬ黒褐色で喰つ附いて居る大きな疣を見ると麗二は何となく微笑まずに居られなかつた。よく幼い時などは椽側に日向ぼっこしながら祖父の膝にのつかつてあの疣を珍らしさうに大切らしくいぢくつたものであつた。祖父は微笑を浮べて麗二の顔を覗めながら

「麗うたの腕うでつ節ぶしに筋ぢみの入つたのには驚いたよ。」

などと他愛もない事に笑ひ興じながら煙草を喫つて居た。こんなにして父も笑つた。母も興がつかつた。妹達は何か互に突き合つて麗二の顔を見ては笑つて居た。祖父は尙も獨りて話し止めなかつた。

「麗よ。こんな事があるんだからまあ聞いて見い。汝おまへがなあ、まだ五つ頃だつたかな、汝おまへはなあ毎日／＼夕方になれば丁度お日様が沈む頃になると時も違はず泣いたんだぞ。それが丁度二百日ばかりもつゝいてなあ——ほんとに手こずらしたもんだ。終には俺がどうとう負んぶして田圃たなぼなんぞに出て行つたがなあ汝があんまも泣き止まぬので俺までが何だか悲しくなつてそつと涙を拭くことがあつたんだぞ」

祖父はこんなことまでも何だか自分の事でもあるかの様になあと云ふ所に力を入れて話すのであつた。話

はそれから夫れへと遷つて行つた。末の妹までが全で雀みたようにべちや／＼と他愛もない話を饒舌り立てた。田舎の夜は次第に進んで話や笑聲のどぎれ間には深いしんみりした沈黙の空氣が村中にひろびろと漲つて居た。

と突然今迄饒舌りつゞけて居た祖父が變な事を云ひ出した。

「おゝれの……………いつてることが……………ことが……………よくわ、わかる……………か」

丁度それは泥酔した人の發する言葉のようなものであつた。そしてその次の瞬間祖父は目をやはらかに閉ぢたまゝ氣の脱けた様に力無く後ろに倒れた。父も母も麗二も妹達もこの突然の不幸な出來事に驚かされて祖父に抱きついたまゝ

「お父さん！お祖父さま！」

と暫らくは大人の聲と子供の聲が纏れ合つた。

「麗や、お醫者さんだ！早く早く」

麗二の父は急き込んでこう叫んだ。麗二は何を考ふる暇も無く夢中に村の醫院まで走りつづけた。

醫者は驚いて自轉車でかけつけた。祖父の病氣は殆んど皆が想像した通り卒中風であつた。然し幸な事には醫者の手當で祖父はやがて茫乎と眼を見開いた。でもその眼には少しの光りもなく唯頬は眞蒼になつてブル／＼震わて居た。

「麗！麗！麗二！」

次の刹那に祖父はやゝ明瞭と麗二の名を呼んだ。麗二はそれまで殆んど氣をうばはれた様にして醫者の後に

突つ立つて居たのであるがこう呼ぶ祖父の聲を聞くと熱い涙が止度もなく頬を傳つて流れるのであつた。

「お祖父さま〜」

彼は涙を揮つて祖父の手をしつかと握つたまゝ、こう呼んだ。祖父の敷いた敷蒲團の上に親子六人の涙ははら〜と落ちた。祖父はもうそれ以上何とも云はないで黄ばんだ眼で凝乎と天井を瞞めて居た。しばらくして醫者は大分危険な状態にあるのだがまあさし迫つて危い様な事はないと云ふ意味を告げて歸つて行つた。其夜は皆祖父の周圍で一目も寝なかつた。純さんと純さんのお母さんも來て色々世話してくれた。麗二はひとり最近の十時間許りの間に自分の上に降りかゝつた變化——殘虐な運命の仕業——が強く心を傷めるのを氣づかずに居られなかつた。しかしよく考へて見ればこの十時間だけでも早く自分を歸らしてくれた惠深い運命に對して感謝せねばならぬかのようにも思はれた。

翌日二人の伯母が來た。ついで親類の人々が來た。

祖父の病勢はかはらなかつた。そして時々目を開いては麗二の名を呼ぶのであつた。

時はその間にも流れ止まなかつた。そんなにして居る中に七日が過ぎた。他家の門には松が立つた。飾りがかけられた。そして赤い顔をした紋付きの男達が賑やかに騒いだ。村はづれには小屋がかゝつて花芝居が始まつた。若い村の男女が新しい下駄を履いて戯れながら芝居を見に出掛けた。しかし麗二の家は實際憂慮の綾羅におほはれて居た。たゞ毎日二度づゝお醫者の自轉車が門柱にたてかけられた。それでも依然祖父の病勢は變らながつた。麗二はそれのみ非常に氣にかけた。

かうして麗二は祝福せられたと同時に呪咀せられた彼自身の生活を憐なんだ。身も心も共に連日徹宵の看護

に少なからず疲憊した。

割れる様に苦しい頭を厭へて時々門前の小川の土橋つちばしの上にならずむと春めいた温かさうな陽の光りや村の氏神の大鼓の音などがやうやく麗二に彼が一つ歳を加へた事を告げる様な氣がしたのだつた。

野良には一人の百姓も出て居なかつた。そして黒ずんだ小川の水は沸々と音をたてながら彼の足もとを流れるのだつた。程近い山峽の工場の煙突からも今日は一條の煙だに登つて居なかつた。こう云ふ景色を眺めて居ると人知れず麗二の眼には熱い涙が浮ぶのであつた。

丁度その時近所の小供が走つて來た。その手には三年前の追懷に力強く貽されて居る通り麗二に宛てた一通の手紙を持つて居た。その手紙の主は彼が三年間余りの都市の生活に多くの刺戟を與へ色彩を増し少なからず緊張の度までも強くしてくれた彼の意中の異性であつた。彼は歸郷の前日彼女に宛てて出した彼の手紙を思ひ起した。そして今度の唐突な不幸が彼の心の大半を占領して居る彼女の事までもわすれさせたのかと思ふと彼は茫乎はなやうと手紙を受取つたまゝ再び急いで歸つて行く小供の影が純さんの家の籬の影にかくれるまで見送つて居た。

「S子さん〜。」

麗二は低く呼んでみた。

手紙には今日夕刻から村の芝居に行かないか。自分も屹度行くと云ふ意味を簡單に女らしい修飾語に填めて綴られてあつた。

行かうか。殆んど人事不省のまゝで時々眼を開くと麗！麗二！と呼ぶ祖父の青ざめた顔の靜かな表情があり、

い、と眼に浮んだ。行くまいか。こう思ふとS子の今に泣き出しさうにして小屋の中をあちこちと見廻して居る綺麗な顔つきが力強く麗二の心を占領した。そして暫らくの間はこうした二つの心像が互に二つ纏れ合つて容易にとけさうにも見なかつた。行かうか。行くまいか麗二はどうも決しかねて途方に暮れた。彼は醫者の來るのを待つてそれに依つてどうなりと決心しようと思つた。

やがて醫者が來た。麗二は一所に祖父の病室に入つた。祖父は丁度眼を開いて居た。そして彼が室に入るや否や

「麗や、汝も——もう——あと——さんねん——ばかりに——なつたのに——あ——あ」

と眞個にさびし氣に云ふのであつた。麗二は今たくらんで居る計劃の裏でも搔かれたように突然戰慄した。しかし彼は強いて

「お祖父さま——」

と心を取り直して云つて見た。しかし祖父は返事もしなければ眼も開けなかつた。

醫者が歸る時麗二は後から跟いて行つて祖父の病状を詳しく聞いて見た。お醫者は詳しく説明した後兎に角決して安心して好い状態にあるのではないんだけれど特別の變化が無い以上今四五日の中に危いといふような事はないでせうと附加へた。

これを聞くと麗二は何だか非常に祝福せられてあるように感じた。嬉しかつた。喜ばしかつた。そしてどうしてもその言葉の通りにあれがしと信じたかつた。彼は内密で隠れて芝居に行かうと即座に決心した。S子に遇ひに行かうと決心した。夕飯をすましてから麗二は何やら後髪をとつてひき歸されるやうな不安な感じ

を抱きつゝ、こうした事を人から見られてならぬ恐怖に戦いて村はづれの芝居小屋に急いで行つた。灰色の黄昏の中には村の若い男女の戯れながら芝居に急ぐ姿が無数に浮んで見えた。

小屋は青いアセチレンの光に明るく照らされて居た。そしてその狭い木戸を澤山の人々は流れ込むように押し合つて行くのであつた。麗二もその中に混つて百姓娘の油臭い髪の毛の香をかがされた。入つて見ると丁度粗雑な舞臺に今しも朝顔棚の彼方から表はれた目の大きな頬の張つた脊の低い明智光秀が竹槍の先を尖らして居る所であつた。

彼は芝居に目を注ぐより以前に或る自分の目を要する問題をもつて居た。それはあのS子の所在を捜し當てる事であつた。

彼は青竹で區切りを着けられた稜敷を左から中央にそれから右に注意深く見廻した。そして最後にまん中の溜りの人々を一人／＼精密に眺めた。しかしその何處にも約束のS子は見出されなかつた。彼は失望した。しかし彼の心の何處かにはまだ一縷の望みが力強く残つて居た。

「屹度すぐ來るに違ひない」

こう考へて麗二は決して誑されたのではないと信じようとつとめて見た。そして自分がおかしな村芝居に來て居ることを誰から見出されるのも非常な不名誉に感ずる様にマントを頭からかぶつて木戸口に近い所に席をとつて居た。そして終始注意深い視線を木戸口の方へ拂つて居た。

丁度舞臺ではおかしな程の光秀が前後に注意しながら竹槍をもつて上手の方に忍びよる所であつた。しかし麗二はどうしてもその芝居を見て居る氣にはなれなかつた。



麗二の頭には懐しいS子の幻影があつた。同時に不圖目を瞠つて麗二！と呼んでゐる病床の祖父があつた。

「何時まで来ないんだらう。こう来ない譯はないのになあ」

麗二は幾度か心の中で自分自身に囁いて見た。そして来ない理由はない。屹度来るに違ひないともするど来ないかも知れぬといふ悲しい観念が起るのを打消すように思ひ直した。

しかし彼は家の事が氣になつた。祖父の事が心配の種であつた。彼は何度も何度も歸らうと決心した。しかし「あゝおそくなつてすみませんでした」と云ひながら小走りに走つて来るS子の姿を思ひ浮べると何だか引留められるような感じに捉はれて踏み止つた。と又祖父の姿が歸宅をすゝめるように明瞭に浮んで来た。それは随分前の祖父の姿であつた。而も薄暗い土藏の二階に上つて講談本を読み耽つて居る祖父の姿であつた。とそつと後ろから忍びよつて小さな竹の端で祖父の頬の大きな疣を衝くのは幼い麗二の姿であつた。知らぬ振をして居た祖父はその時突然後をふりむいて麗二を膝の上に抱きあげて

「麗だつたんか。祖父さんはちつとも知らなんだ」

と仰山な表情をしながら頭を撫で、やるのであつた。幼い麗二はそれでも戯れ止めなかつた。

「お祖父さん。この疣はどうして出来たい？」

こんな事まで問ひかけた。すると祖父はおとしもつけずに

「こりやなあ祖父さんがいつだつたか夢を見たんぞ。そりや面白い夢さ。なんでも年とつた美しい神様が来て祖父さんにね、立派な金色に光る珠をやるよと仰言つたんぞ。するとね祖父さんは非常に喜んでね。翌朝起きて見ると頬つべたにこんな疣か出来て居たんだ。」

こんな事も云つた。そして麗二が「はい、さうそうつきなぞと云つて逃げて行くと又知らぬ顔して講談本など心から讀み耽るのだつた。」

噫あの時代の祖父さんと今の祖父さんどころ麗二は思ひ比べて見ると何だか恐ろしい氣がした。もう舞臺には白木綿に歪んだ字で何とか書きならべたよごれた幕が降りて居た。しかし麗二は氣根強くS子が来るのを待つて居た。

その三時間ばかりの間に麗二は苦しい／＼心の争闘を経験した。しかし何時までたつてもどうどうS子は來なかつた。

麗二は苦しかつた。悲しかつた。そして口悔しかつた。芝居がはてゝから寒い寒い夜風に吹かれて彼は凍つた石塊道を通つてS子の家の前まで來た。しかしもう固く雨戸は閉されて家の中にも人の聲はしなかつた。彼は急に足をはやめた。何だか兇變でも起つたような暗い豫感がひし／＼と彼の胸に迫つて來た。

彼は愈よ家のそばまで來た。そしてもう暗い豫感にたゞきれなくて走り出した。しかしすぐ彼はびたりと立留まつた。家の中は常になくかう晩くまで明々と照らされて居た。その上雨戸さへ閉めてなかつた。

麗二は慄然とした。

再び彼は走り出した。そして丁度門を入らうとした刹那一人の伯母に突然出會つた。

「麗さんか。今まで何處に行つてゐなすつた。祖父さんは／＼……………」

伯母はもうさめ／＼と泣いて居た。

「わッ祖父さんが……………」

麗二はこう云つたまゝ立ちすくんで動かなかつた。熱い涙が止度もなく兩頬を流れた。

「さつきから麗さんを皆んなが捜したんだけど……祖父さんは麗二／＼と呼びつゞけにどうどう……仕方がないのでお隣りの純吉さんが麗さんの身代りになつて祖父さんの處に走つて行きなんしたら祖父さんはもう眼が見えなかつたもんだからおゝ麗二かど云つて純吉さんの手を固く握つたまゝどう／＼……」  
伯母の話をこゝまで聞くと麗二はもう居ても立つても居られなかつた。そして伯母の足もとにわつと泣き伏した。

もう夜は余程更けて居た。麗二は漸く立ち上つて家にも上り得ずにあの思ひ出多い土藏の影に茫乎立つて、め／＼と泣きつゞけた。熱い涙はひどい悔恨の情と一所にいつまでも／＼限り無く込み上げて來た。やがて麗二の方へ來る淋しい足音が聞えた。そしてその足音の主はやがて

「麗二！麗二！」

と呼んだ父である。麗二は泣きながらすぐ

「はッ……」

と云つたが父親の顔を見るのがどこまでも恐ろしくてならなかつた。

「そんな所にぐ／＼して居たつて何になる。早く上つて來るがい。」

こう云つて父は主家の方へ行くのであつた、麗二は下男部屋からかすかにもれて來る光にその時ちらと父親の顔を見た。嗚呼その時の父の顔——言葉に云ひつくせない父親の顔。彼はその顔がどうしても忘れる事が出来なかつた。彼はほんとに耐へ切れなくなつて地に座つたまゝどうどう

「お祖父さんくごうを許して下さい」  
と叫んだ。そして怒りもしないで行つて了つた、父親が有難かつた。

まだ汽車は轟々と音をたてながら幕進してゐた。麗二は涙がつきる程この悲しい追憶に泣いても泣き足らなかつた。

どうどう或る驛で麗二は正宗の瓶を買つた。そして洗面所に行つて瓶に口付けたまゝ一息に飲み下した。彼の足は急にふらくし出した。

怨めしい程憎らしいS子である。あの女が居なかつたらあの懐しいお祖父さんを心ゆくまで満足さして上げたのだろうに。こう麗二は思はぬわけに行かなかつた。しかし麗二はあの芝居さねなかつたらと云ふ、より根本的な愚痴もこぼされるのであつた。あゝ怨めしい村芝居。眼の太い頬の張つた脊の低い役者。彼はそれを記憶の碑銘から削除することは出来なかつた。あの光秀の瞳がわすれられなかつた。しかし彼はあの一座が今どこをどうして放浪して居るか知らなかつた。

すさまじい音と共に汽車は走る。喪期もはれぬのに強いて學校に出るように故郷を出發させられた若者をのせて。また高原の小さな停車場を通り過ぎた。乗客はまだみんな眠つてゐた。